

## ⑦ 等身大の声の重さ

映像作品『福島：沈黙の声たち』（作：佐藤千穂、リュ・ルカ）を見て

川守田 進一

「世の中には言うてはいけないことと、言うても仕方がないことの2つがある」と書いたのは作家の筒井康隆だったでしょうか。災害文化研究会の会場でこの映像を見て、ふと思い出した言葉です。映像は福島出身の女性が原発事故後の故郷で、自分の周りの人たちに事故について取材したルポルタージュです。両親や祖父母、姉、親戚の方たち、行政そして原発事故裁判の原告の人たちまで、多くの方の話を聞いています。そこには困惑、あきらめ、静かな怒り、あるいは復興への思いとさまざまに語る姿があります。事故については大津波の危険性を指摘されながら対応を怠ってきたという“人災”の部分も明らかになってきました。あの日、風が首都圏へ向かって吹いていたら、今とは違う状況になっていたかもしれません。

東京オリンピック招致の際に安倍首相が原発事故について「アンダーコントロール」という言葉を使い、招致実現に至ったことは記憶に新しいことです。一方で、汚染水を貯蔵するタンクが増え続けている光景も時折テレビなどで報道されます。しかし、「復興」が強調されるたびに原発事故の被災地、被害者の現実が置き去りにされてはいないでしょうか。実際に現地でも原発災害について声を上げにくい状況が起きていることは『その後の福島 原発事故後を生きる人々』（吉田千亜著、2018年、人文書院）にも詳しく書かれています。

私は40年近く前に福島第一原発を見学しました。たしかチェルノブイリの事故の前です。新聞労連東北地連の見学会の参加者として原発と周辺の地域を自分の目で見ることができました。当時のことは細かく覚えてはいませんが、強く印象に残ったのは発電所のセキュリティーの厳しさと立地自治体に建つ立派な役場や体育館、公民館と

いった新しい公共施設の数々です。原発立地の交付金の恩恵が形になっていました。2011年のような事故が実際に起こるとは当時は考えもしませんでした。しかし、「チャイナ・シンドローム」というジェーン・フォンダ主演の映画は一部の人の間で話題になっていました。でも、その時は自分は実際にはまだ映画を見ておらず、知識に乏しかった私には現場と映画を関連付けることは難しいことでした。チェルノブイリ後であればもっと切実な感覚で見たと思います。

福島では多くの地域で避難指示の解除が行われ、避難者の帰還が始められました。ただ、あの日から9年がたち、故郷を離れた地で仕事に就き、学校に入り、生活をつくってきた人たちが、放置されたままの故郷に簡単に帰ることができるとは思いません。「なりわい」と「暮らし」をゼロからまたつくることは容易ではないでしょう。戻らないという選択をせざるを得ない人は多いと思います。

被害を訴えるよりも復興の必要性を叫ぶ声が目立つようになってきました。首相の言葉を額面通りに受け取る人がいてもおかしくない状況が作られつつあり、次第に被害や今後の生活への不安を訴える声が小さくなってきたような気がします。同調圧力という言葉も浮かびました。でも、原発事故を起こしたという事実を消すことはできません。被害を受けた人たちの声は小さくなくても通奏低音のように決して消えることはないでしょうし、また声を出し続ける人がまだまだいることも事実です。伝え続ける努力も必要です。

映像を制作した佐藤千穂さんは、現地の人たちの等身大の声を取材し、私たちに問いかけているのだと思います。「あなたはこの現実をどう思いますか？」と。